２０２３年８月２５日　金沢文庫キリスト教会 夏期修養会

マタイによる福音書 第６章２０節

　富は、天に積みなさい。そこでは、虫が食うことも、さび付くこともなく、また、盗人が忍び込むことも盗み出すこともない。

「天に富を積もう」

　本日は夏期修養会ということで、「天に富を積もう」というテーマを掲げさせていただきました。

私の中に一つの問いがあります。それは、確かな救いを頂くには、どうしていったらよいかということです。私どもキリスト者の最終目的は、神の救いを頂いて、神の国に入れて頂くことです。言い換えれば、聖書の言う「永遠の命」を頂くことだと思います。そこから、キリスト教会の伝道の最終目的も、教会員だけでなく、教会に連なる皆が、さらには、すべての人が、神の救いを頂いて神の国に入れて頂くこと、聖書の言う「永遠の命」を頂くことであると思っています。

そのためには、まず、主イエス・キリストをこの私の救い主と信仰告白して、バプテスマを受けることでしょう。それで大きな関門を一つクリアしたことになると思います。救いに近づき、神の国は近くなり、「永遠の命」に手が届く所まで来たと言えるでしょう。しかし、バプテスマはゴールではない、としばしば言われます。

ところで、使徒パウロは、コリントの信徒への手紙 一 第９章２４節以下でこう言っています。｢24 あなたがたは知らないのですか。競技場で走る者は皆走るけれども、賞を受けるのは一人だけです。あなたがたも賞を得るように走りなさい。25 競技をする人は皆、すべてに節制します。彼らは朽ちる冠を得るためにそうするのですが、わたしたちは、朽ちない冠を得るために節制するのです。26 だから、わたしとしては、やみくもに走ったりしないし、空を打つような拳闘もしません。27 むしろ、自分の体を打ちたたいて服従させます。それは、他の人々に宣教しておきながら、自分の方が失格者になってしまわないためです。｣そう言っています。パウロはここで、｢わたしたちは、朽ちない冠を得るために節制するのです｣と言っています。そうです。キリスト者は皆、朽ちない冠である救いを頂くために、日々励んでいるのです。そして、今注目したいのは、引用しました最後の言葉です。「むしろ、自分の体を打ちたたいて服従させます。それは、他の人々に宣教しておきながら、自分の方が失格者になってしまわないためです｣。あれほど熱心に伝道したパウロでさえ、自分が失格者になってしまうかもしれないと言っているのです。パウロでさえ、信仰のゴールに到達し、既に救いの冠を頂いたとは言っていないのです。ですから、私どもも救いを得たいと思うなら、神の国に入れて頂きたいと思うなら、パウロと同じように、｢自分の体を打ちたたいて服従させ｣る必要があるのです。

　そこで思います。救いを頂くために、私どもはどうしたらよいのでだろうか。具体的にどうしたらよいのか。どのような生き方をすれば、神の救いを頂くことが出来るのか。どうすれば、神の国に入れて頂けるのか。どうすれば、永遠の救いを頂くことが出来るのか。その問いを持ちつつ聖書に聴いていました。そこで示された聖書の言葉の一つが主イエスがおっしゃった言葉でした。「富は、天に積みなさい。」です。その言葉を今回の夏期修養会のテーマとさせて頂きました。地上に富を積むのでなく、天に、神のもとに富を積むということです。そうすれば、「そこでは、虫が食うことも、さび付くこともなく、また、盗人が忍び込むことも盗み出すこともない。」のです。

　残念ながら、地上の富は、失われてしまうのです。聖書が言うように、地上の財産は盗まれてしまうことがあります。そのため、資産家の方々は家に厳重な警備をしています。また、火事などで、すべ焼けてしまうこともあります。また、株券などは大暴落することもあります。そして大恐慌で酷いインフレになった時などは、お金の価値が暴落しました。地上の宝は、いつまでもそのままではないのです。

　世界的によく読まれている小説「赤毛のアン」の終わりに近い場面で、アンの養父のマシュウ・カスバートが心臓発作で亡くなってしまうという悲しい場面があります。その直接の原因が、カスバート家が預金していた銀行が倒産したという新聞記事を読んだ事でした。妹のマリラや養女のアンのために、勤勉に働いてきたマシュウにとって、確かに取引銀行の倒産は相当なショックだったのでしょう。それが心臓発作の直接の原因でした。マシュウ亡き後、アンはマリラを支えながら暮らしていくのです。そのように、日々汗を流して一所懸命働いて、老後のために蓄えておいた財産も、銀行の倒産によって、一瞬の内に消えてしまうことがあるのです。真に残酷なことです。「地上に富を積んではならない。そこでは、虫が食ったり、さび付いたりするし、また、盗人が忍び込んで盗み出したりする。」とおっしゃった主イエスの言葉の通り、地上の財産はあっという間に無くなってしまうことがあるのです。その点で、天に積んだ富は、無くなってしまうことも、価値が暴落することもないのです。

　では、天に富を積むとは、どんなことをすることでしょうか。主イエスはこの場面で、そのことを具体的には、おっしゃっていません。私が考えるに、天に富を積むとはどんなことか考えてごらん、と主イエスがおっしゃっているように思えるのです。ですから、皆さんそれぞれで考えて欲しいのです。

　天に富を積む生き方が、自分自身にとって最善の生き方であることに気付かされた人の一人として、使徒パウロを挙げることができるでしょう。パウロはフィリピの信徒への手紙 第３章５節から１１節で、こう言っています。「5 わたしは生まれて八日目に割礼を受け、イスラエルの民に属し、ベニヤミン族の出身で、ヘブライ人の中のヘブライ人です。律法に関してはファリサイ派の一員、6 熱心さの点では教会の迫害者、律法の義については非のうちどころのない者でした。7 しかし、わたしにとって有利であったこれらのことを、キリストのゆえに損失と見なすようになったのです。8 そればかりか、わたしの主キリスト・イエスを知ることのあまりのすばらしさに、今では他の一切を損失とみています。キリストのゆえに、わたしはすべてを失いましたが、それらを塵あくたと見なしています。キリストを得、9 キリストの内にいる者と認められるためです。わたしには、律法から生じる自分の義ではなく、キリストへの信仰による義、信仰に基づいて神から与えられる義があります。10 わたしは、キリストとその復活の力とを知り、その苦しみにあずかって、その死の姿にあやかりながら、11 何とかして死者の中からの復活に達したいのです。」

　救い主、主イエス・キリストと真(まこと)の出会いをした人は、どうすれば救いに与(あずか)れるかを知り、それを求めます。その人の中で価値の大転換が起き、何を一番大切にすべきかが変わってしまうのです。まさにパウロがそうでした。その意味で、パウロは救いに与ることの素晴らしさを、さらには、富を天に積むことの素晴らしさを誰よりもよく知っていた一人と言えるでしょう。救いの素晴らしさを知ることと、富を天に積むことの素晴らしさを知ることは、そうすることに熱心に心を傾けるための第一歩だと思います。その意味で、私どもが頂こうとしている救い、神の国に入れて頂くこと、「永遠の命」を授かることの素晴らしさをしっかり知っておくことは大切なことだとでしょう。

　そこで私が考えるに、その一つは、主イエスの言葉、聖書の言葉に聴き従うことです。主イエスの言葉、聖書の言葉に聴き従うことで、天に富を蓄えることが出来ると思います。そのことを思わされる聖書箇所があります。ルカによる福音書 第１０章２５節から２８節です。こう言われています。「25 すると、ある律法の専門家が立ち上がり、イエスを試そうとして言った。『先生、何をしたら、永遠の命を受け継ぐことができるでしょうか。』26 イエスが、『律法には何と書いてあるか。あなたはそれをどう読んでいるか』と言われると、27 彼は答えた。『心を尽くし、精神を尽くし、力を尽くし、思いを尽くして、あなたの神である主を愛しなさい、また、隣人を自分のように愛しなさい』とあります。』28 イエスは言われた。『正しい答えだ。それを実行しなさい。そうすれば命が得られる。』」

　ここで言われている「心を尽くし、精神を尽くし、力を尽くし、思いを尽くして、あなたの神である主を愛しなさい、また、隣人を自分のように愛しなさい」との言葉に従うことは、富を天に積む一つでしょう。そうすることで、「永遠の命を受け継ぐことができる」のですから、これこそが、「富を天に積む」ことだとも言えるでしょう。「心を尽くし、精神を尽くし、力を尽くし、思いを尽くして、あなたの神である主を愛しなさい、また、隣人を自分のように愛しなさい」とのみ言葉に真剣に従ってまいりましょう。

　ところで、ある面から見れば、地上に富を積むことと、天に富を積むことは、紙一重であるとも言えるでしょう。それは、天に富を積むことは、地上の名誉を求めるのではなく、神に栄光を帰すことでもあるからです。行うことは同じでも、行ったことを自分の名誉とせず、神に栄光を帰すならば、それは天に富を積むことになると思われるからです。

かつて、こんな事があったそうです。第二次世界大戦中ドイツで、ある牧師がナチスに抵抗したため軍隊に入れられ、ソビエト連邦と戦う東部戦線に送られたそうです。ナチスはしばしばその手を使って教会を迫害しました。その牧師は、その後ソビエト連邦の捕虜になってしまいます。彼は、捕虜収容所に入れられます。するとすぐに、志願者を募って牧師を養成する神学校を収容所の中に作ってしまったそうです。勿論、充分な施設はなかったでしょう。それでも、彼の熱意に主は応えてくださり、彼の熱意に動かされ、捕虜収容所にいながら神学の学びをする人がいたのです。彼は満足し、得意になったそうです。戦後、そのことを監督と呼ばれる教会の指導者に、得意になって報告しました。すると監督はこう言ったのです。「若い兄弟よ、キリスト者に成功はありません。キリスト者は実を結ばせていただくだけです」。そう言われて、彼は大切なことに気付かされました。彼はのちに、このことを正直に書き残しました。謙虚に自分の間違えを認めることが出来たことは素晴らしいと思います。また、厳しい収容所生活の中で熱心に牧師養成に努めた人に対して、少しも遠慮することなく、正しい事をはっきり言えた監督も素晴らしいと思います。私どもは、「豊かに実を結ぶ」と言うよりも、豊かな実を結ばせて頂くのです。私どもの手柄にしてはならないのです。私どもが豊かに実を結ばせていただいたら、それによって、天の父なる神は栄光をお受けになるのです。このように、自分の名誉とするのではなく、神に栄光を帰したなら、それは天に富を積むことになると思います。

　天に富を積むことは、決して難しいことではないでしょう。大きな愛の事業を行えれば、それに越したことはないでしょう。ただ、そうでなくても、小さな愛の業を行うこと、相手のことを思いやり愛を込めた一言を言うことも、天に富を積むことではないでしょうか。若い人が、電車の中でお年寄りや体の不自由な人や妊婦の方に席を譲る、小さな親切も、天に富を積むことの一つだと思います。

　既に故人となられていますある牧師は、伝え聞くとところによると、信仰生活の実践として、十一献金、十分の一献金を、ご自分でなさるだけでなく、教会の方々にはっきりと勧められていたそうです。それは、古くから続く、信仰者の伝統で、収入の十分の一をお捧げするということです。その牧師は、教会のために祈り、奉仕をし、十一献金を捧げることを積極的に勧めておられたそうです。それも、天に富を積むことの一つだと思います。

ご一緒に天に富を積んでまいりましょう。そして、神の救いに与(あずか)り、神の国に入れていただき、聖書が教える永遠の命を授けていただきましょう。

　お祈りを致します。

　私どもの救い主、復活の主、イエス・キリストの父なる神よ。あなたは、私どもに救いに与らせようと日々心を砕いてくださっています。どうぞ、あなたと、御子主イエスの愛とお導きを常に心に留めることができますように。そして、御子が「富は天に積みなさい」と勧めてくださっていますから、そのみ言葉に従う者とさせてください。どうぞ、わたくしども一人一人が、天において、富む者となれますようお導き下さい。天に富むことを、何よりの喜びとする人生を歩ませてください。私どももの救い主、復活の主、イエス・キリストのお名前によって祈ります。アーメン。